

研究テーマ 絶滅危惧種の保全事業の費用対効果を最大化する

南九州・南西諸島域イノベーションセンター

特任教授

中島 慶次

https://ris.kuas.kagoshima-u.ac.jp/html/100007484_ja.html

研究の背景および目的

現在、日本には3800種近くの絶滅危惧種がいるとされています。これら絶滅危惧種に対する保全事業は、たとえ国が行う事業であっても、目標を達成して終了した成功事例はほとんどありません。保全事業の費用対効果を最大化し、事業を成功に導くため、国の政策形成から現地での事業実施まで、どのように設計してマネジメントすればよいか？本研究では、その方法を社会面・技術面から検討していきます。

■おもな研究内容

長期に渡って目に見える成果が出ていない絶滅危惧種の保全事業であっても、適切な目標の設定とマネジメントによって急激に成果が現れ、卒業に向かう保全事業もあります。保全事業の費用対効果を最大化することを目指して、以下の内容に取り組んでいます。

●種の特性や状況に合わせた効果的な保全事業の目的・目標の設定

保全事業の対象種の特性や事業内容、関係者の協力のしやすさなどを考慮して、目的に合わせてどのような目標を設定すると保全事業の効果が高くなるのか。

●目的・目標に合わせた保全事業の設計とマネジメント

保全事業全体を通したシナリオ（どのように進めていくか）と目標に対する事業の進捗の段階によって、事業内容やそのマネジメントを変えた方がいいことがあります。限られた資源（予算など）を効果的に活用するために、事業内容をどのようにマネジメントするのが適切なのか。

●地域の自然資源の持続的な利用



写真:シマフクロウ
(出典:環境省HP)



写真:イヌワシ
(出典:環境省HP)



写真:チョウセンキバナアツモリソウ
(出典:環境省HP)

期待される効果・応用分野

○期待される効果：保全事業の費用対効果が最大化し、保全事業が卒業に向かう。

○応用できる分野：絶滅危惧種の保全事業だけではなく、鳥獣の管理やネイチャーポジティブに関する事業への応用が期待できます。

■共同研究・特許などアピールポイント

2026年3月の日本生態学会総会で、シンポジウム「絶滅危惧種の保全事業の費用対効果を最大化する優先順位付けの方策を考える」を企画し、開催しました。この分野では、これまでにない新しい内容のシンポジウムとして多くの方から好評を得ることができました。現在、生物多様性国家戦略でも絶滅危惧種の保全に定量的目標を設定することが求められています。今後、野生生物の保全や管理にも費用対効果の考え方が取り入れられていくと考えています。

研究分野	環境政策、環境配慮型社会、環境影響評価、自然共生システム
キーワード	国立公園、世界遺産、野生生物の保全と管理、地域振興